現代史の言霊

連載07

本誌・伊熊幹雄

古傷を開いてはいけない

マリアノ・ラホイ・ブレイ（スペイン前首相）

▼十一月の死去（フランコの大罪）

今から十年ほど前のことだ。

スペイン・バルセロナ近郊に住む電気技師、ファン＝ルイス・モレノは、死の床にあった父親から衝撃の告白を聞いた。

「お前は私の本当の子ではない。ある神父からお前を買ったのだ」

一九七〇年代の初頭、十万ペセタを支払ったという。当時のスペインで、アパート一戸がまるまる買える大金だった。幼馴染みの親友アントニオ・バロソも同じように買われたという。

二人は互いの母親とのDNA鑑定を密かに行い、同じ結果を得た。「あなたが今の母親から生まれた可能性はゼロ」だった。

二人はやがて、自分たちの出生記録にたどりつき、ほぼ四十年間、全くの別人として育ったことを確認した。同様の体験を持つ人たちを集め、全国組織を作った。

三十万人「赤ん坊売買」の闇

現在では、モレノと同様に、母親から盗まれ、売られた赤ん坊はざっと三十万人いると推計されている。ところが、ほんの十年前までこれほどの規模はもちろん、赤ん坊の売買があったことまで、一般のスペイン人は知らなかった。

「すべてはフランシスコ・フランコ総統とカトリック教会のせいだ」とモレノは断罪する。

赤ん坊を母親から取り上げ、売買するという犯罪行為は、スペイン内戦（一九三六～三九年）の時代に始まった。「社会党と共産党主導の「人民戦線政府」と、「フランコ率いる反政府側の戦闘はまたたく間に陰惨な殺戮の応酬になった。特に病院と刑務所では生き地獄が現出した。

刑務所については、英作家ジョージ・オーウェルの筆を借りよう。

「監獄は土牢としか呼びようのない場所だった。イギリスでこれと比較できるものを見つけるのに十八世紀までさかのぼらなければならないだろう」（岩波文庫『カタロニア讃歌』＝都築忠七訳）。

作家が目撃したのは、人民戦線側の支配地域だ。フランコ側はさらに劣悪だった。

大人が生き延びられない過酷な環境で、若い母親に連れられた赤ん坊が生きていけるはずがない。反政府側では乳幼児は母親から引き離された。背後にはカトリック教会がついていた。教会ネットワークで、子供を欲しがっている家庭に引き取られた。

スペイン内戦は一九三〇年代後半には、「全体主義対民主主義の抗争の最前線」とされ、世界中の若者の血をたぎらせた。

人民戦線側には、オーウェルやアーネスト・ヘミングウェイら著名作家、写真家ロバート・キャパなどが加わり、フランコ側の非戦闘員の無差別殺害や集団レイプなどの非人道的行為を活写した。そのイメージがあまりに強烈だったため、勝利したフランコ政権は、フランコ総統が七五年十一月二十日に八十二歳で死去するまで、米欧では「極悪非道」のイメージをぬぐえなかった。

一方で、フランコは「君主制」を復古させ、自分の後継者にボルボン家のファン・カルロスを指名。フランコ死後に即位したファン・カルロス国王の下で、スペイン民主化が進んだ。第二次世界大戦で中立を貫いたこともあって、スペイン国内では保守派を中心に「参戦せず、社会を安定させた」という

フランコ再評価が進んだ。

ところが、近年は再々評価が始まった。赤ん坊の売買などフランコ政権の闇が次第に明るみに出て、内戦ぼっ発以後の非人道的行為が再検証されている。内戦の世界的権威である英国人学者、ポール・プレストンは近著を『スペインのホロコースト』（邦訳未刊）と題して、フランコ側の戦争犯罪を糾弾した。

フランコ陣営にはとりわけ残虐にふるまう理由があった。同陣営は共産主義、社会主義におよそ病的な嫌悪を抱き、単に軍事的に打倒するのでは足りず、戦闘員、同調者を未来永劫根絶すべく、殺害、拷問、集団レイプで、恐怖をスペイン全土に植え付けた。

赤ん坊を体系的に両親から奪ったのは、「赤色思想は遺伝する」という反政府側の似非心理学者たちの理論に基づく。「人民戦線側の子供は、早い時期に両親から引き離して、再教育するべきだ」と彼らは説いたのである。

ところが内戦終結後も、赤ん坊の売買は続いた。内戦後はスペイン国内で人民戦線派が抹殺されたから、「悪い遺伝子」の母親、父親は消えたはずだ。大半の母親は、修道女から「お子さんは死んだ」と告げられ、「遺体に最後の別れを」という願いさえ退けられた。彼女たちはもちろん、政治的に何の問題も抱えていなかった。「カトリック教会はビジネスとして、人身売買を続けていた」と冒頭のモレノは言う。

掘り起こされるフランコの遺体

そうなると、独裁者フランコ本人やフランコ時代全体を、全く異なる目で見る必要がある。

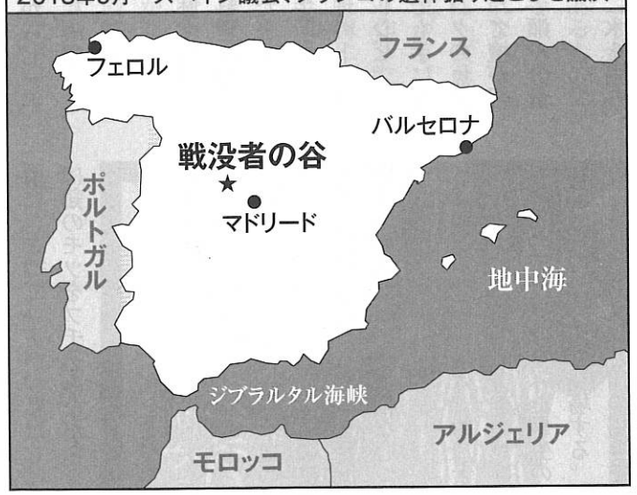
フランコは、ガリシア地方にある海軍基地の町フェロルという片田舎で、何世代も続く軍人の家に生まれた。モロッコ駐在時代に軍功をたてて出世し、反政府側の首領になった。地元の美女と結婚した後は浮いた噂もなく、偏狭な保守主義を終生守った。

「退屈な男」「面白味がない」が定評で、他の独裁者のように人格、幼少時体験まで踏み込んだ研究は皆無だった。そんな独裁者の陰で四十年近く、途方もない人権侵害が組織的に続いていた。

社会労働党のペドロ・サンチェス首相は今年、マドリード郊外にある「戦没者の谷」という巨大モニュメントに眠るフランコの遺体を掘り起こして、別の場所に移すことを決め、議会もこれを承認した。保守・国民党のマリアノ・ラホイ前首相は、「古傷を開いてはいけない」「スペイン人の大多数はもうフランコの話をしたくない」と首相を批判した。

だが、最近まで隠されていた赤ん坊売買は、かさぶたの下に大きな膿が残っている証左である。総統が死去する直前に売買された子供はようやく四十代前半。大嘘をついてきたカトリック教会ともども、「忘却」で済ますには、この傷は生々しすぎるのである。

GRANGER.COM/AFLO

スペイン内戦関連年表

1931年4月	スペイン第二共和政成立
1936年2月	人民戦線の挙国一致内閣成立
7月	スペイン内戦始まる
1939年4月	スペイン内戦終結
1947年7月	スペイン、再び「王国」に。フランコは終身元首
1975年11月	フランコ死去、フアン・カルロス国王即位
1977年6月	41年ぶりに総選挙実施
1981年9月	ピカソの「ゲルニカ」、スペインに返還
1986年1月	スペイン、ポルトガル、欧州共同体（現EU）加盟
2018年9月	スペイン議会、フランコの遺体掘り起こしを議決